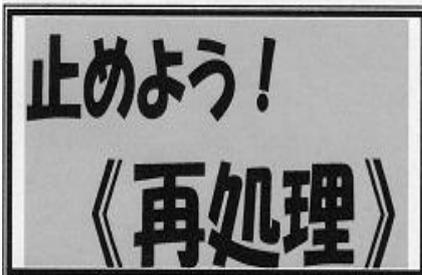


三陸の海を放射能から守る
岩手の会 (略称) **三陸の海・岩手の会**
 郵便振替 02240-5-102650
 ホームページ 《再処理/岩手の環境》
<http://sanriku.my.coocan.jp/>
 《本紙の全バックナンバー掲載》



《天恵の海》

2016(平成28)年
 4月13日
 第164号
 編集事務局 S.Oshida
 TEL・FAX 019-623-1636

講演会

報告 その1 (文責編集部)

演題 **原子力政策、日本の取るべき道**

講師 **アーニー・ガンダーセン氏**



講演する
 アーニー・ガンダーセン氏



主催 **三陸の海を放射能から守る岩手の会**
 後援 **原発からの早期撤退を求める岩手県学識者の会**
日本科学者会議岩手県支部

核燃サイクルともんじゅ

私達、三陸の海・岩手の会主催の講演会が、二月一三日岩手大学学生センターで開催されました。講師はアメリカの原子力技術者アーニー・ガンダーセン氏。氏は福島第一原発の事故後いち早く「炉心メルトダウン」を指摘して来日、3号機の「即発臨界爆発」の可能性や4号機の「核燃料プール崩落・ジルコニウム火災」の危険性を訴え、その対策についての講演を行いました。

今回の来日も、福島や東京・広島などで講演を行い、早急な福島事故汚染水対策と長期にわたる被曝への対策、そして核燃サイクル計画の不合理を訴えるためのものでした。

来日第一声の岩手での講演会には、約九〇人が参加し、講演を聴いたあと、一〇項目もの質問や意見交換がありました。

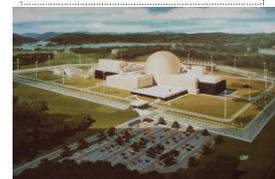
当日の講演の要旨をまとめ二回に分けて報告します。

(編集部)

核燃サイクルは失敗の歴史



ウエストバレー
 再処理工場



クリンチリバー増殖炉

核燃サイクルは「ちぎれた鎖の輪」

「核エネルギー推進支持の人々」は、「核燃料サイクル」という言葉を定着させようとしましたが、しかし、これは「サイクル」ではなく「チェーン(鎖)」です。そのチェーンが壊れたのです。核燃サイクル計画は破綻しています。

アメリカでは、ウエストバレー再処理工場やクリンチリバー増殖炉で三〇年間研究しましたがトラブル続きで完成を断念し廃止しました。私は写真のウエストバレー再処理工場働いていましたが、一九八一年この工場の真下の地下水からストロンチウムが発見され、結局閉鎖されました。

破綻の理由「コストが高い」

核燃サイクルは上手く回ったとしても結局はストロンチウムなど放射性毒物との闘いです。これを解決して行くには膨大な経費がかかります。

アメリカでは当初の計画の実に二〇倍のコスト増となりました。

ウランとプルトニウムを混ぜて使う「モックス」燃料も試みられましたがこれも同じことで、予定の二〇倍のコストがかかり取りやめとなりました。今、アメリカの約一〇〇基の原発の、どこでも「モックス」は使われていません。

破綻の理由②安全が確保出来ない

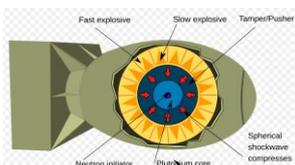


スーパーフェニックスの火災事故

私の再処理工場での経験は非常に高い放射能の中で作業でした。高速増殖炉の冷却材に使われるナトリウムは空気に触れると爆発的に燃えるので火災の危険があります。一九九五年日本のもんじゅが火災を起こし、フランスの

スーパーフェニックスも二〇〇四年に火災を起こして撤退しました。アメリカの増殖炉は八〇億ドル(約8800億円)を費やしましたが失敗、一九八三年閉鎖されました。アメリカエネルギー省には、「もんじゅ研究の部門」があつて毎年一〇〇億円も使っています。危険なもんじゅ研究の成果を日本から報告してもらつて研究しているのです。

破綻の理由③核拡散に繋がる



ウランで原爆を作るのは技術的に難しいが、プルトニウムを使えば簡単になります。そのプルトニウムは原子力発電によって生み出されます。イギリス、インド、パキスタン、北朝鮮は原発からのプルトニウムで原爆を作ったのです。

日本のプルトニウムに関する国際公約

日本の国際公約は「発

電に消費出来る以上のプルトニウムは製造しない」です。しかしもんじゅが動かないのに無理矢理再処理を行ったので、日本のプルトニウムの精製は必要数を超えています。日本は「作ろうとするなら一年以内に数十発の原爆を作れる技術」を持ってます。アメリカも中国も「再処理は採算が合わない」のでやめました。それなのに日本は「もんじゅ」と「六ヶ所」にしがみついています。

会場からの質問

質問1 アメリカの国家機関は日本の核燃サイクルにどのような判断をしているのか？

答 国務長官や米大使の発言にあるように日本の原子力政策を支持しておりエネルギー省は核燃技術開発を支援している。国防総省ははっきりとした発言をしていません。

質問2 原発について内部告発を行った経緯は？

答 原発会社の副社長でしたが、原発の安全不備について米原子力規制委員会に内部告発し、無視され会社を首になりました。不当にも、逆に一五〇万ドルの支払いを命ぜられ六年間闘いました。家族や市民の支援で耐えられました。アメリカでも癒着があります。

質問3 福島事故は避けられなかったか？

答 GE(ゼネラルエレクトリック)が一九七〇年代に設計した当初から問題が指摘されていましたが、対策を怠り事故に至りました。あの地震津波は昼

に起こったので、原発には約一千人の作業員がいました。夜ならばせいぜい百人。吉田所長の陣頭指揮もなく、もっと大変なことになっていたでしょう。福島第二も東海も女川も助からなかったかも知れません。

質問4 使用済み核燃料はプールの何年入れておけば安全になるのか？

答 崩壊熱を下げるには五年くらい必要です。福島は今、地下水を遮断することが最も大切。遮断に成功したら、チェルノブイリのように人間が近づかないようにして、百年間待つこと。百年待てば、放射線が減衰し、作業員の健康を守りながらの作業は数倍も簡単になります。チェルノブイリでは、大きな覆い建造物を作り減衰を待っています。地

下水を遮断する技術は、アメリカの天然ガス採掘の技術者が良く知っています。

質問5 原子力に代替えるエネルギーについて

答 原発のように巨大な発電所で電気をまかなう時代は終わりました。これからは各地の沢山の小発電所からの電気を、コンピュータで制御し、再生可能エネルギーを使う時代です。コンピュータも太陽パネルもバッテリーも安価に大量生産出来るようになって来ました。日本は耐用年数が来た原発の再稼働などをやってはいけない。新エネルギー時代にふさわしい先導的役割を果たすべきです。

質問6 プルトニウムの監視体制はどうなっているのか？

「日本の核燃サイクル、合理性ない」

米国国務省高官、上院外交委員会証言

米国国務省のカントリーマン次官補(核安保・不拡散担当)は、三月一七日上院外交委員会で証言し「日本が進める、使用済み核燃料からプルトニウムを取り出す核燃サイクルは合理性がない」「すべての国が再処理事業から撤退すれば喜ばしい」と述べました。日本が進めている青森県六ヶ所再処理工場については、中国や韓国も同様な計画を検討し始めており、核不拡散の観点から懸念を表明したといっています。(朝日新聞 二〇一六年三月一九日)



プルトニウムは手で持てる

プルトニウムは内部被ばくすれば超最悪の毒物。しかしアルファ線は飛距離が短く紙でも止まる。